

・八二メートルの高さがあつた。適確な数字ははじき出せないが、これにも泡の巻以下の捷水路による下刻作用があつたようにみえる。

宮古、真渡の真中付近で一八七・四一五メートル、真渡船場で二〇一・五メートル、さらに蟹川橋のちよつと下流で二〇一・一七メートルを計測した記録がある。これはさらに下流のものより低い、計測の不確かさかも知れないが、或は河川の広狭、氾濫度などの原因があるのではないかと思う。

高田橋では二一九・四四メートル、これは量水標水位が二〇九・九四メートルであるから、九・五メートルの増水ということになる。しかし計画の河床高はその当時既に三・五メートル高くしてあり、さらに堤防はやや高くしてあるので、今後の防災は耐え得るのかと思う。

さらに上流で二三七・九八メートルを測り、馬越では二六九・二四メートルとなっている。馬越の○点は二六五・〇五メートルであるから、ここでは四・一六メートルの増水ということになる。現在の馬越ダムの最低魚道底が標高二六二・五〇メートル、排砂門底の高さが、右岸二六三・〇〇メートル、左岸二六三・〇〇メートル、大川堰取入口底高が二六三・一五メートルであるから、昭和三十三年、三十四年と共に九月に襲うた台風では、約五メートル増水して、岩崎堰の取入口が土砂で埋積したが、大正二年の洪水の状態とあまり大差がなかったように思われる。

その後間もなく大正六年十月一日の洪水実測によって、改修河川の流量調査が行なわれたことがあるが、その記録をみると、大正二年八月二十七日の一三六ミリ降雨量に対して、これが連続六時間降りつづけた結果によるものとして、一方里当降雨量三、三三六立方尺、この五五%が流出したものととして一、八三四立方尺、小谷における最大流量を一〇〇、〇〇〇立方尺と算出したのがみえる。